

ホッブズ、ルソーの社会思想にみる恐怖

恐怖をめぐる思想史のための一視座

飯野 和夫

はじめに

恐怖は人間の基本的な感情であるから、それについてふれていない思想家を探すほうがむずかしいだろう。それゆえ恐怖をめぐる思想について論じようとしても、何らかの形で場面・文脈を限定せざるをえない。ここでは、ともに社会理論家であるホッブズとルソーによる太初の人間の恐怖への言及をとりあげ、それについてフランス系の現代思想を代表する思想家たち、フーコー、スタロビンスキー、デリダが加えた批評も参照しつつ考察してみたい。西欧文化圏の過去の思想家が切り開いた問題圏において現代の思想家が思索を展開する、そうしたつながりも感じられるようにしたい。

1 ホッブズ

1-1 『リヴァイアサン』

恐怖は本源的である——ジャン・スタロビンスキーによれば、ルネサンス以降の西洋の政治哲学のほとんどにこうした見解が見出される。論争があったとしても、それは恐怖が現実にあることについての論争ではなく、恐怖というこの感情の帰結についてのものだった。¹⁾

社会契約説の代表的理論家であるホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) が、恐怖を人間に本源的なものと考えていたことはよく知られている。やはりスタロビンスキーが指摘しているが、²⁾ ホッブズによれば、本源的な恐怖こそが、同じく人間の本性に根ざしている他者を支配しようとする欲求を押しとどめている。『リヴァイアサン』(1651) に先立つ『市民論』(1642) でホッブズは次のように主張している。

もし恐怖 (fear) がなくなれば、人間たちは生来益々熱心に、交際することよりも支配することを望むだろう。したがって次のように言わなければならない。あらゆる大きく長続きする社会の本源は、人間が抱き合う相互的な好意よりも、彼らが抱き合う相互的な恐怖にある。(『市民論』第1部第2章)³⁾

さて、恐怖は人を逃走させるが、ホッブズが重要と思うのはそのことではない。恐怖は懸念であり、疑惑、不信、用心といった精神活動へと発展していくのである。

恐怖という語で、私は将来の災いについてのある洞察を意味している。私は逃走が恐れのため一つの帰結だとは考えない。疑惑、不信、用心 (heed)、恐怖に対する備え、もまた、恐怖 (fearfull) に付随している。(同所、原注)⁴⁾

ホッブズの主著『リヴァイアサン』では恐怖はどのように論じられるだろうか。ホッブズによれば、自然状態にある人間は恐怖の中で互いに向き合っている。

《社会状態の外には、各人の各人に対する戦争がつねに存在する》人々が、彼らすべてを威圧しておく共通の権力 (power) なしに生活しているあいだは、彼らは戦争と呼ばれる状態にあり、そういう戦争は各人の各人に対する戦争である。すなわち戦争は、たんに戦闘あるいは闘争行為にあるのではなく、戦闘によって争おうという意志が十分に知られている一連の時間にある。(『リヴァイアサン』第1部第13章)⁵⁾

よく読むと明らかなように、ホッブズの語るこの戦争はいつも実際に戦われているというわけではない。ところで、ミシェル・フーコーは1976年にコレージュ・ド・フランスで「社会を守れ Il faut défendre la société」と題した全11回の講義を行ったが、とくに1976年2月4日に行われた第5回の講義でホッブズを論じた。そこで彼はこうした戦争の本性を確認している。

ホッブズの原初的戦争においては戦闘は行われぬ。血も流されず、死体もない。あるのは表象、表示、記号であり、誇張されてずる賢い偽りの表現である。策略、反対を装った意志、確信を装った不安、である。人は表象が取り交わされる舞台にいる。⁶⁾

恐怖の状態に置かれるとき、人は身を守るために、想像を、反省を働かさざ

るをえなくなる。想像、反省とはつまり、フーコーが挙げている「表象、表示、記号」からなる作用である。恐怖の中で人間は、自らについて、その心理的精神的領域にまで踏み込んで「洞察 foresight」を、あるいは省察をすることになる。ホッブズは、こうした人間の自己への「洞察」を対象化し、そうした理論的基礎の上に、国家 (commonwealth) の主権 (sovereignty) を考察する。

人びとが、彼ら自身に対するあの抑制（その抑制の状態において、人びとはコモンウェルスの中に住んでいるのだが）を導入するさいの、彼らの究極の原因、目的ないしは企図は、彼ら自身の保存についての、そのことによるもっと満足な生活についての、洞察である。言い換えれば、あの悲惨な戦争状態から、彼ら自身を解放することについての洞察である。（『リヴァイアサン』第2部第17章）⁷⁾

それでは、国家の主権はどのように実現すると考えられたのであろうか。ホッブズは「二つの道」、すなわち「設立によるコモンウェルス」と「獲得によるコモンウェルス」とを提示している。前者は次のように示される。

ひとつ〔の主権者権力 (sovereign power) の獲得の道〕は、人々が彼ら自身の間で協定して、ある人または人々の合議体が彼らをあらゆる他人に対して保護してくれるであろうと信頼して、その人または合議体に意志的に服従する場合である。（同所）⁸⁾

これは『リヴァイアサン』の代表的理論としてよく知られており、とりわけこの道において人びとは洞察を働かせることになる。他方、もう一つの「獲得によるコモンウェルス」については次のように語られる。

ひとつは自然的な力によるものであって、子供たちが服従を拒否すれば子供たちを破滅させることにより、人が、自分の子供たちとさらにその子供たちとを、彼の統治に服従させる、という場合がそれであり、また、戦争によって、彼の意志への屈従を条件として敵の生命を助けることによって、敵を彼の統治に服従させる場合がそれである。（同所）⁹⁾

獲得によるコモンウェルスとは、主権者権力が力によって獲得されるコモンウェルスである。そして、力によって獲得されるとは、人々が個別的に、あるいは多くの者がいっしょに多数意見によって、死や枷への恐怖に基づいて、彼らの生命と自由を手中ににぎっている人または合議体のすべての行為を権威づける、という場合である（同書第2部第20章）。¹⁰⁾

これは主に、征服された国民が、征服国家を主権として認めて服従する場合であろう。その場合、この主権の成立は「設立によるコモンウェルス」のように表象の世界だけを基礎とするのではなく、国家がすでに成立し、国家の間で実際に戦争が戦われることを背景としていよう。ここでも恐怖が原理として働いているが、今回は現実の裏付けをもった恐怖である。そしてホッブズは、この獲得による主権を、父親、あるいは自然状態においてはむしろ母親、と子供の関係になぞらえている。すでに引用中でも親子関係についてふれられたが、次のようにも語られる。

それ〔親が子供たちに対してもつ支配の権利〕は、(…)明言された、あるいは他の十分な証拠によって示された、子供の同意からひきだされる。(同所)¹¹⁾

未成年者は、自分を維持してくれた人にしたがうべきである。人が他人に臣従するようになるのは生命の維持を目的とするのだから、各人は自分を救うことも減ぼすこともできる人に従順を約束するものと想定されるのである。(同所)¹²⁾

子供は自らの命を守るために親の主権に同意しているものとみなされる。この親のもつ主権と獲得による主権は、弱者の意志によっているという意味で同じ性質を持つ。そして、主権が弱者の意志によって成立するという性質は、恐怖が現実の暴力に基づいているか、むしろ想像上のものか、という点を除けば、設立による主権にも共通している。

要するに、親権的および専制的な二つの支配の権利と帰結はともに、設立による主権のそれとまったく同じであり、その理由も同じである。(同所)¹³⁾

フーコーはここに注目する。

協定でも、戦闘でも、両親と子供の間関係でも、いずれにしても意志、恐怖(peur)、主権という同じ一揃いが繰り返される。この一揃いが暗黙の計算によって引き起こされるか、暴力の関係によって引き起こされるか、自然の事実によって引き起こされるかはどうでもよい。問題になるのが果てしない駆け引きを生み出すような恐怖であるか、喉元に突きつけられた刃による恐怖であるか、子供の泣き声であるかはどうでもよい。¹⁴⁾

たとえ征服があったとしても、結局は被征服者が征服者を承認しない限り、主権は成立しない——こうホッブズは主張している、とフーコーは考える。

主権が生じるためには、他者の意志がなければ生きられないときでさえ生きたいと望む、ある根源的な意志が実際に存在しなければならないが、それで十分である。(…) この意志は恐怖に結びついており、主権は決して上から形成されるのではない。最も強い者、征服者、あるいは両親の決断によって形成されるのではない。主権はいつも下から、恐怖を抱いている者の意志によって形成されるのである。¹⁵⁾

「主権は決して上から形成されるのではない」という点には、後に、『性の歴史』第一巻『知への意志』で示されるフーコーの権力論の考え方——権力は下から作られるという考え方——をすでに見てとることができよう。

結局、フーコーの解釈によっても、恐怖は人が自らの生き方を選び取っていく根源の出発点となる。ホッブズは、人びとの精神の領域にまで踏み込んで、権力の成立を哲学的に分析する視点を導入したと言えよう。¹⁶⁾

1-2 ホッブズ主権論のねらい

フーコーは 1976 年 2 月 4 日の第 5 回講義の後半では、ホッブズが主権の成立について上に見たような哲学的視点をとった理由について考察をしている。小論の論旨からはやや外れるが一瞥しておこう。フーコーは、哲学的視点をとるホッブズにおいて、現実の「戦争があるかないかは重要ではない、主権の設立において問題なのは戦争ではない」と考える。¹⁷⁾ フーコーはさらに、ホッブズがこうした現実の戦争を重要視しない考え方をするには何か理由があるのではないかと考え、次のように言う。

ホッブズが反駁するというより、排除しようと、不可能にしようとしたもの、戦略的に対極にあるもの、それは政治闘争において歴史的な知を作動させようとするあるやり方なのである。リヴァイアサンの戦略的対極にあるものは、思うに、当代の政治闘争において、戦争、侵略、略奪(…)についての——そしてこうしたあらゆる戦争行為が(…)法や制度に与えたらしい影響についての——歴史的な知を政治的に使うことなのである。¹⁸⁾

具体的に言うと、歴史上の、ノルマン人によるイギリス征服の事実を、政治闘争に持ち込むことを、ホッブズは避けようとしたとフーコーは考える。ホッブズが念頭に置いていたのは「ディガーズ Diggers」であろう。ディガーズは、イギリスのピューリタン革命期の 1649 年に共有地の耕作を始めた一団であり、

中世の共同体を理想としたが、近代社会主義の先駆的運動と見なされることもある。彼らは、ノルマン人とイギリス人の戦争は現在の体制にまで持ち込まれて、国王、貴族、および彼らに与した「富者」や教会と、それ以外の者たち——「小市民的」ないし「庶民的」階層——との対立関係として存続していると考えた。¹⁹⁾ そこでは「法は毘」であり、「権力の道具」であるにすぎない。こうした法は「革命」によって廃止されなければならない。フーコーは、ここに権力の分析の新しい形が見られると考えている。

あらゆる法、あらゆる形態の主権、あらゆるタイプの権力は、自然法と主権の設立という用語ではなく、一方の他方に対する支配の関係の無限定な運動として、無限定に歴史的な運動として分析されなければならない、という考えがはじめて形成された。²⁰⁾

そこでは「革命」あるいは「反乱」は「絶対的権利」である。というのも、それは、戦争の継続としての社会秩序において「歴史的な必然」だからである。フーコーは、ホッブズの『リヴァイアサン』のあのねらいは、歴史の内に「対立 *affrontement*」と「支配 *domination*」を見るこうした「政治的歴史主義」に対して、「哲学的法的言説」によって国家の主権を擁護することにあつたと見るのである。²¹⁾

戦争があってもなくても、敗北であろうとなかろうと、契約が、市民（臣民）の意志がなければならない。²²⁾ 「各人の各人に対する戦争」と言って、いたるところに戦争を宣言するかのようにでありながら、ホッブズの言説は、実は「戦争」や「征服」を、それらが繰り返されること——現実的な恐怖が繰り返されること——を、避けようとしたのである。

以上、ホッブズが「哲学的」視点をとったことにも思想的背景があると考え、フーコーの議論は大変興味深い、小論の論旨はホッブズの哲学的視点、恐怖をめぐる視点を、それ自体価値あるものとして評価することにある。以下、恐怖をめぐる言説の分析へと戻ろう。

2 ホッブズからルソーへ

スタロビンスキーは論文「恐怖に打ち克つ」²³⁾において、ホッブズからルソーに至る、そしてルソーの内における、恐怖についての思考の進展をコンパクトに跡づけている。以下、スタロビンスキーに従って、この進展を追ってみ

よう。

スタロビンスキーによれば、ホッブズを批判する者たちは、恐怖という動機を捨てはしなかったが、恐怖に伴うであろう攻撃性という要素や、用心といった要素への注目は弱まった。したがって、ホッブズのように、恐怖の内に市民社会が創設される原因を見ることはできなくなった。恐怖はむしろ一時的な戦慄に還元されてしまい、ただ逃走や麻痺を招くと考えられた。モンテスキュー (Montesquieu, baron de, 1689-1755) は『法の精神』(1748)の冒頭で、このことから一つの「自然法」、すなわち「平和」を導き出すことになる。

自然状態にある人間は (・・・) 最初は自分の弱さしか感じないであろうし、彼の臆病さは極端であろう。(・・・) このような状態においては、各人は自分が劣っていると感じる。自分が他人と同等だとはほとんど感じない。だから攻撃し合おうなどとはしないし、平和が第一の自然法となるであろう。(『法の精神』第1部第1篇第2章)²⁴⁾

ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) は『人間不平等起源論』(1755)において、自然状態から社会の成立へ、さらには社会の墮落へと至る人間の歩みを跡づけた。一方、社会契約説については、それをむしろ人民主権の正当な政治体を展望し、創出するための理論として用いた。これが『社会契約論』(1762)である。

さて、スタロビンスキーによれば、ルソーも自然状態にある人間においては恐怖が優越すると主張するが、これは、ホッブズに反対して、社会が形成される前には戦争はないとはっきり言明するためである。

人間は自然には平和を好み、怖がりである。少しでも危険がある場合の彼の最初の行動は逃げることである。彼が戦いに慣れるのは、ただ習慣と経験によってである。誰か人と交流するようになった後に初めて、彼は他人を攻撃する決心をする。彼は市民になった後でなければ兵士にはならない。(「戦争状態は社会状態から生まれる」)²⁵⁾

こうして、攻撃は「交流」が始まった後初めて出現する。スタロビンスキーは「ルソーの仮説において、自然の人間の生活には二つの局面がある」として、まず「恐怖の局面」を、次いで「習慣によって獲得された自信の局面」を挙げている。²⁶⁾ 人間は社会生活へと移行する際に、恐怖を克服するのである。ルソーは、自然状態の人間についてホッブズよりもモンテスキューの考えに与し、

この状態の人間は臆病であるとして、支配欲、攻撃性は認めないが、人間が恐怖の状態を克服してゆく局面に注目する点はホッブズと共通している。

ルソーは『人間不平等起源論』においても、ホッブズよりもモンテスキューの権威に頼ることの方を選ぶことになる。ただし、ここでもルソーの議論は単に自然の人間が臆病であることの確認にはとどまらない。スタロビンスキーの言及する箇所を詳しく見てみよう。

ホッブズの主張するところでは、人間は本来大胆で、攻撃し、戦うこと以外を求めない。ある有名な哲学者〔モンテスキュー〕によれば、逆に、(…) 自然状態の人間ほど臆病な者はいない。(…) 予想しうる肉体的な快と苦痛を見分けることができない場合や、冒さなければならない危険と自分の力とを比較できない場合はいつも、目の前に現れるあらゆる新しい光景に彼がおびえることは疑いない。もっとも、このような事態は自然状態においてはまれである。そこでは万事がきわめて単調に進行し、地表は、結集した諸国民の情念と移り気が引き起こすことになる唐突で絶え間ない変化を蒙ることはないのだから。さて、未開人は動物たちに混じって分散して生活するが、ほどなく動物たちと競う機会をもつようになり、まもなく動物たちの比較をするようになる。そして、動物が力の点で自分にまさっている以上に、自分が器用さにかけて動物にまさっていることを感じると、彼はもはや動物を恐れないことを覚える。(『人間不平等起源論』第1部、下線による強調は引用者)²⁷⁾

人間は本来臆病である。²⁸⁾ だが、やがて自分の力と動物の力との「比較」をすることができるようになり、それにつれて動物を恐れることもなくなる。さらには、「予想しうる肉体的な快と苦を見分け」たり、「冒さなければならない危険と自分の力とを比較」したりすることもできるようになり、「新たな光景」におびえることもなくなるのではなかろうか。ここでは、先の引用でふれられた「習慣と経験」の内容が「比較」という知的行為として捉え直されている。恐怖を前提とし、恐怖の克服の局面に注目するルソーは人間精神をめぐる哲学的な議論に踏み込んでいる。こうした姿勢においてルソーはホッブズと共通性をもつと言えよう。²⁹⁾

3 『言語起源論』と『人間知識起源論』

ルソーは、『言語起源論』(1781 [死後出版])³⁰⁾ において、「原初の時代」の人間が言語活動を獲得していく過程を考察している。この書の第9章で、ル

ソーはあらためて出発点に恐怖を据えている。

〔原初の人間たちは〕力のほかになんの裁定者ももっていなかったので、お互いに相手を敵だと思っていた。(…)彼らはなにも知らないのだから、なんでもかんでも恐れ、自分の身を守ろうとして攻撃した。人類の命運に沿って、地球の表面にただ一人放り出された人間は、一個の粗野な動物であつたに違いない。彼は、他人から受けるのを恐れていた危害を、他人に対して及ぼす用意ができていた。恐れ (crainte) と弱さとは残忍さの源である。(『言語起源論』第9章)³¹⁾

ルソーはここでは「原初の人間」に、これまで認めてこなかったホッブズ流の攻撃性、「危害を他人に対して及ぼす用意」を認めているように見える。だが、『人間不平等起源論』第1部からの先の引用で「自然状態では万事がきわめて単調」であるとされていたのにも似て、「原初の時代」に暴力はないに等しい。ルソーは次のように語っている。

人間たちは出会えば互いに攻撃したと言ってもよい。だが、彼らはめったに出会うことはなかった。いたるところ戦争状態だったが、地上全体は平和だった。(同所)³²⁾

さて、『言語起源論』第3章でルソーは、こうした、まれな出会いの一つについて考察している。この一節は、後段で見るようにデリダも論及したことでよく知られるようになった。ここでの議論はさらに哲学的である。原初的な恐怖に支配されていた未開人においては、「巨人」などという比喩的な語が初めに誕生したと考えられ、起源における言語は隠喩的であつたとされる。

ある未開人が他の未開人たちに出会くと、彼はまずおびえたことだろう。彼は恐怖 (frayeur) のため、それらの人間を自分より大きく強いものと見てしまっただろう。そこで彼は、それらの人間に巨人という名をつけてしまっただろう。多くの経験を積んだ後に、彼はそれらのいわゆる巨人たちが自分より大きくも強くもなく、彼らの背丈は彼が最初巨人という語に与えた観念とは全然似つかわしくなかったと認知しただろう。(…)このようにして、比喩的な語は本来の語以前に誕生するのであって、その際、情念はわれわれの目を幻惑し、情念がわれわれに提示する最初の観念は真理の観念ではないのである。私が語や名について言ったことは、容易に文章の言い回しについてもあてはまる。情念によって提示された錯覚的なイメージが最初に現れたのであるから、それに対応する言葉づかいもまた最初に作り出されたのであつた。次いで、開明された精神が最初の誤りを認め、

誤りを生み出したのと同じ情念にとらわれている場合にだけその表現を用いるとき、その言葉づかいは隠喩となったのである。(下線による強調は引用者)³³⁾

「多くの経験」を積んで初めて、未開人は、この「巨人」という言葉に結びついている「自分より大きく強いもの」という観念と、この言葉が指示している実際の対象とが釣り合っていないことに気づくことだろう。恐怖が克服されてあらためて認知された他者は、今後は他の「本来の語」、つまり「人間」という言葉を名とすることになるだろう。

他人を名指す「巨人」という言葉には、恐怖という情念が混じっている。恐怖が今や克服され、恐怖のもとでのイメージが「錯覚」「誤り」であったと気づいて、人は自分がそれまで使っていた「巨人」という言葉を「比喩」「隠喩」として客観視することができるようになる。スタロビンスキーの表現を借りれば、この比喩表現は「指示されている他人という対象については誤りで、表現されている感情の点では真実」であることになる。³⁴⁾

前節で見たように、戦争についての断片では、人との交流という「習慣と経験」が語られ、『人間不平等起源論』ではさらに踏み込んで「比較」が語られていたが、ここでは、こうした概念が、言語の領域で具体的に検討されていることになる。「比較」という知的行為によって、人間は「反省の時代」³⁵⁾を開くことになるのである。

さて、この一節にデリダはその初期の重要著作である『グラマトロジーについて』(1967)でふれている。³⁶⁾ 恐怖の例が持ち出されたことについて、デリダは次のように考察を開始する。

ルソーにとって、自然状態にある人々は互いに孤立して生活しており、恐怖は原始人の最初の情念である。原始人は一方では他者に歩み寄ろうとする傾向も持つと考えられるが、他者に隣人として近づくためには「恐怖」を克服しなければならない。遠くから見ると他者はとてつもなく大きく、支配者、脅威と感じられる。それは小さく、か弱い人間の経験である。人は、対象をゆがめて大きく見せてしまうこのような知覚を克服してから初めて話し始めるのである。

ところでコンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac, 1714-1780) の『人間知識起源論』(1746) がルソーの『言語起源論』に影響を与えたことはよく知られている。デリダは、ルソーが恐怖について語っていることにもコンディヤ

ックの影響があるのではないかと考え、コンディヤックのこの著作も参考にしつつ考察を進める。コンディヤックは『人間知識起源論』で、ノアの大洪水の後、「どんな記号の使い方も知る前に」砂漠の中をさまよう二人の子供を仮定し、やはり彼らの恐怖についてふれている。この二人の子供は、たとえば恐怖をきっかけとして、助けを求め、助けを与えようとして、叫びあるいは動作で話し始めたとされている。

このようにして彼ら子供たちは、本能だけによって互いに助けを求め合い、与え合ったのである。(…)たとえば、恐ろしい目にあった場所を目にすると、人はかつて自分が陥ったその危険に相手が身をさらさないように警告するために、恐怖の記号である叫びや動作を模倣する (imiter) のであった。(『人間知識起源論』第2篇第1部第1章第2-3節、強調は引用者)³⁷⁾

デリダはこの立論を独自の観点から読解する。たとえば恐怖は言語活動の契機となるであろうが、デリダによれば、純粹な恐怖において言語活動が開始されるわけではない。むしろ恐怖は「模倣」、反復される中でしか意味を持たない。未開人が、恐怖を感じた場面に関して模倣あるいは反復をする中で、恐怖が意味を獲得し、言語活動が成立していくのである。こうしてルソー自身が語っていたように「多くの経験を積んだ後に」、言語とそれが示す観念は「真理」性、客観性を帯びていくのである。デリダは、模倣(反復)は「知覚と反省との中間」にあるとしている。³⁸⁾

＊

＊

＊

以上、ホッブズとルソーの社会思想において人間の恐怖がどのように位置づけられているかを、フーコー、スタロビンスキー、デリダの所説を導きの糸として検討した。ホッブズ、ルソーとも、恐怖をきっかけに人間の本性について哲学的考察を行った。さらに二人において、恐怖の感情は、人間が反省へと歩みを進める契機となると考えられた。恐怖を克服ないし回避しようとする努力を一契機として、人間は、反省の時代へ、社会状態へと足を踏み入れると考えられたのである。

注

- 1) ジャン・スタロビンスキー「恐怖に打ち克つ」(ジャック・ベールシュトルド他編『十八世紀の恐怖』法政大学出版局、2003、所収) 125-126 頁。フランス語による元の論文は次のようである。Jean Starobinski, «Surmonter la peur», in Jacques Berchtold et Michel Porret (éd.), *La Peur au XVIIIe siècle*, Droz, 1994. ジャン・スタロビンスキー Jean Starobinski (1920-) はジュネーヴ在住の思想史家、文芸批評家。フランス 18 世紀、とりわけルソーの研究家として知られる。
- 2) 同書 126 頁。
- 3) Thomas Hobbes, *De cive*, the English version, a critical edition by Howard Warrender, Clarendon Press, 1983, Part I, Chap.II, p.44. この版は、ラテン語原典 (1642) の英訳版 (1651) の校定版である。『市民論 (臣民論) *De cive*』からの二つの引用箇所はスタロビンスキーの論文に教えられた (上掲書 126 頁)。なお、『市民論』は『物体論 *De corpore*』(1655)、『人間論 *De homier*』(1658) とともに『哲学体系 *Elementarum philosophiae*』をなし、ホッブズの「哲学三部作」と呼ばれる。これらはいずれも未邦訳である。
- 4) *ibid.* p.45.
- 5) 『リヴァイアサン』水田洋訳、岩波文庫 (全 4 冊)、1982-1992 (第 1・第 2 分冊改訳版)、第 1 分冊 210 頁。なお、この書に限らず、小論での訳文は必ずしも翻訳書の訳文と同一ではない。『リヴァイアサン』は、1651 年に英語版 (ロンドン)、1668 年にラテン語版 (アムステルダム) が刊行された。リヴァイアサンとは、『旧約聖書』の「ヨブ記」41 章に記された、神を除き、「地の上に並ぶものがない」怪獣の名。ホッブズはこれによって、人々が生命を守り、平和を維持するために力を合成する契約を結んで設立した政治共同体 (コモンウェルス) を意味し、それが王族、教会、議会、ギルドなどの集団よりも強いことを象徴した。なお、次の英語原典とフランス語訳を参照した。Thomas Hobbes, *Leviathan*, edited by R. Tuck, Cambridge University Press, 1996 ; Thomas Hobbes, *Léviathan*, traduction française de F. Tricaud, Dalloz, 1999.
- 6) Michel Foucault, «Il faut défendre la société» [以下 DS と略記], Seuil/Gallimard, 1997, p.79-80. ミシェル・フーコー Michel Foucault (1926-1984) は「構造主義」の代表者の一人と目される周知のフランスの哲学者。本書は講義原稿をまとめたもの。日本語訳の出版計画はあるが、現時点では未刊。ただし、中山元氏がインターネッ

ト上で「1976 年度のフーコーのコレージュ・ド・フランス講義『社会を守れ』」(<http://polylogos.org/>) として講義の内容を網羅的に紹介しており、現時点で日本語で講義の内容を知るために役に立つ。

- 7) 『リヴァイアサン』第2分冊 27 頁。
- 8) 同 34 頁。
- 9) 同 34 頁。
- 10) 同 70 頁。
- 11) 同 72 頁。
- 12) 同 73 頁。
- 13) 同 76 頁。
- 14) Foucault, DS, p.83.
- 15) DS, p.83.
- 16) なお、権力はひとたび成立すると、恐怖を用いつつ、人びとすべてを威圧しておくようになることも、ホッブズは指摘している。「目に見える権力は人びとを威圧し、また彼らがその取り決めを実行し、自然の諸法を守るように、処罰への恐怖によって彼らを拘束する」(『リヴァイアサン』第2部第17章、第二分冊 27 頁)。
- 17) DS, p.84. 以下この節での引用は、独立した引用、「」による引用ともフーコーの記述からのものであり、17 世紀の資料に遡るものではない。
- 18) DS, p.84.
- 19) DS, p.92-94.
- 20) DS, p.95.
- 21) DS, p.95-96.
- 22) DS, p.85.
- 23) この論文については注 1) を参照のこと。ここから小論第3節初めのルソー『言語起源論』第3章からの引用の分析までは、スタロビンスキーのこの論文の展開に依拠している。同論文 126-129 頁。
- 24) 『法の精神』野田良之ほか訳、岩波文庫(全3巻)、1989、上巻 44 頁。フランス語版としては次のものを利用した。Montesquieu, *De l'Esprit des lois*, édition de R. Derathé, Garnier, 1973.
- 25) Jean-Jacques Rousseau, «Que l'état de guerre naît de l'état social», in *Oeuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t.III, p.601. この断片的著述は「サン＝ピエール師についての文書」としてプレイヤード版『全集』第3巻に同主題の他の文書とともに収められた。幾度かにわたる書き直しのあとが認められるが執筆年代は不明である。サン

＝ピエール師 Charles Irénée Castel, abbé de Saint-Pierre (1658-1743) はフランスの聖職者、作家。主著『ヨーロッパ恒久平和論』（全 3 巻、1713-1717）で、人類から戦争の害悪を除こうとして「諸国民の最高法廷」の必要性を説いた。

- 26) スタロビンスキー上掲論文 127 頁。
- 27) ルソー『人間不平等起源論』本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1992、44 頁。
フランス語版としては次のものを利用した。Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes*, in *Oeuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t.III.
- 28) スタロビンスキーは、『人間不平等起源論』第 1 部の終わり近く（82 頁）の展開を念頭に、ルソーが人間の暴力や粗暴な抗争というホッブズ流の仮説を検討することも怠ってはいないと指摘するが、同時に、それらは挿話的なものにとどまり、結局、服従関係の鎖を作り出すことはないと述べている（上掲論文 128 頁）。
- 29) この哲学的な見方と「自然状態」の設定が関連しているとも考えることもできる。
「自然状態」とは理念としての性格をもった仮説であり、それを設定するには、本来の人間、あるいは人間の本性への考察が必要とされるであろうからである。
- 30) 『言語起源論』はルソーの死の 3 年後、1781 年に初めて出版された。『人間不平等起源論』の注として書き出され、1763 年ころまでに完成されたと考えられている。前半では、言語が起源にまで遡って考察される。それによると、話し言葉は情念を伝達するのに適し、人間の最初の言語は詩人の話し言葉であった。文字言語が発達するにつれて、言語は思考の伝達において明晰になるが、心情には語りかけなくなった、とされる。後半では、この言語の墮落と並行して、人間の情念を伝達する旋律の音楽が、技巧的な和声の音楽に取って代わられたとする。
- 31) ルソー『言語起源論』小林善彦訳、現代思潮社、1970、67 頁。フランス語版としては次のものを利用した。Jean-Jacques Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, Ducros, 1970.
- 32) 同書 70 頁。
- 33) 同書 26 頁。
- 34) スタロビンスキー上掲論文 129 頁。
- 35) 同所。
- 36) ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮社、1972、下巻 254-258 頁。ジャック・デリダ Jacques Derrida (1930-2004) は周知の現代フランスの代表的哲学者。小論で扱うのは、特に『グラマトロジーについて』下巻 257

頁の部分である。筆者は次のフランス語原典を利用した。 Jacques Derrida, *De la Grammatologie*, Les Editions de Minuit, 1967. 一般にデリダの著作は、思考の極めて密度の高い展開のため、読解には困難がつきまとうが、言語構造が異なる日本語に翻訳した場合、読解の困難が増すことも考えられる。そこで、本著作についても、以下の英訳を利用することも考えられよう。 Jacques Derrida, *Of Grammatology*, translated by G. C. Spivak, corrected edition, Johns Hopkins University Press, 1997.

- 37) コンディヤック『人間認識起源論』古茂田宏訳、岩波文庫（全 2 巻）、下巻 17-19 頁。筆者が『人間知識起源論』と訳すものと同一著作である。また、筆者が、篇 (partie)、部 (section)、章 (chapitre)、節 (paragraphe) と訳す区分を、邦訳では順に、部、章、節、パラグラフと訳しているので注意されたい。なお、フランス語版としては次のものを利用した。 Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, in *Oeuvres philosophiques*, Corpus général des philosophes français, t.I, éd. G. Le Roy, P.U.F., 1947 ; Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, précédé de *L'Archéologie du frivole* par Jacques Derrida, Galilée, 1973.

- 38) デリダ上掲書 258 頁。

参考文献

小論の内容と関連する、西欧における恐怖の表象を扱った研究として二つの文献を挙げておく。前者は歴史研究であり、後者は 18 世紀における恐怖の表象の諸相を分析している。

ジャン・ドリュモール『恐怖心の歴史』永見文雄・西澤文昭訳、新評論、1997（原題「西欧における恐怖、14-18 世紀」）。原著は次の通り。 Jean Delumeau, *La Peur en Occident, XIVe-XVIIIe siècles*, Fayard, 1978.

ジャック・ベールシュトルド、ミシェル・ポレ編『十八世紀の恐怖 ― 言説・表象・実践』飯野和夫・田所光男・中島ひかる訳、法政大学出版局、2003。原著は次の通り。 Jacques Berchtold et Michel Porret (éd.), *La Peur au XVIIIe siècle : discours, représentation, pratiques*, Droz, 1994.